

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	ホメーロスにおける未完了過去と直説法アオリストの用法に関する一考察
Author(s)	竹島, 俊之
Citation	ニダバ , 9 : 30 - 40
Issue Date	1980-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046320">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046320</a>
Right	
Relation	



# ホメーロスにおける未完了過去と直説法

## アオリストの用法に関する一考察

竹 島 俊 之

1. ヴァインリヒ H. Weinrich の『時制論』Tempus<sup>1</sup>は古典ギリシア語の時制を検討する場合にも有益な示唆をいろいろと与えてくれるように思われる。<sup>2</sup>彼の主張の中で、特に注目すべき点は、フランス語の半過去は物語りの導入部と終結部において固めて用いられる傾向がある、という主張である。<sup>3</sup>彼はフランス語の半過去および単純過去という二つの過去の形式を浮き彫り付与 Reliefgebung という観点で捉え、前者を背景 Hintergrund を述べるのに用いられる時制、後者を前景 Vordergrund を述べるのに用いられる時制と分類する。<sup>4</sup>「前景とは何か、何が単純過去で述べられるかを、先験的に定義することはできない。前景とは語り手が前景として把握しておきたいと思うものである。とは言え、語り手の自由裁量の余地は「語り」の二・三の基本条件によって制約を受けている。前景とは「語り」の根本法則に従えば、話がそのために語られるもの、概要が記載しているもの、標題が要約しているもの、人々がしばし仕事の手を休め、自分の日常ではない世界の話に、ゲーテの言葉を使えば、前代未聞の出来事に聞き耳を立てるようにし向けるものである」<sup>5</sup>とヴァインリヒは説明する。さて、ヴァッカーナーゲル J. Wackernagel は『統語論に就ての講義』の中で、「もし区別をしようと思うならば、一連の行為あるいは経過の主要因がアオリストによって、より多く言い表わされ、細部に亘る詳述は未完了過去で述べられることがあることを時折確認できるだけである」<sup>6</sup>と述べている。ヴァインリヒはこの主張をさらに明確化し、「語り」の重要な構造要因として、すなわち一つの指標として取り出し、「前景」、「背景」という、二つの対立する指標によって物語りを分析していこうとしていると考えることができる。

背景とは、ヴァインリヒの説明によれば、前代未聞の出来事ではないもの、それ自体だけでは誰も聞くようにし向けることができないもの、とは言え聞き手が聴取する際の手助けとなるもの、「語られた」<sup>7</sup>世界の中での聞き手の定位を容易にするものである。一言で言えば付帯事情を表わすものである。<sup>8</sup>さて、物語りの導入部と終結部において半過去が固めて用いられる傾向は二つの過去の形式を持つ他のロマンス諸語のみならず、英語にも、ドイツ語にも（ドイツ語では半過去や進行形に相当する形式がないので、副文によって）その傾向が見られる、と主張する。いわば「語り」の普遍的な形式とみなそうとするのである。ロマンス諸語と同様に過去の二つの対立した形式、すなわち背景の時制としての未完了過去（以下、未完過あるいは impf. と略す）および前景の時制としてのアオリスト（時に、 aor., あるいはアと略す）を持つ古典ギリシア語にもこのことは、当てはまるであろうと推測できる。そこで、典型的な

一人称物語りとしての「語り」の構造を示す、オデュッセウスを分析しながら、このことを裏書きしてみたい。まず、この現象が最も明瞭に現われていると思われる箇所を取りあげてみよう。

テキストの置かれている位置について説明しておく、4巻349～586までの237行はメネラーオスが父、オデュッセウスの消息を尋ねてラケダイモーンの自分の下によって来たテーレマコスに、トロイアからの自分の帰還の話聞かせている件である。それに続いて贈物の遺り取りの対話があり、それに続く部分である。

Ὡς οἱ μὲν τοιαῦτα πρὸς ἀλλήλους ἀγόρευον, 620  
δαιτυμόνες δ' ἔς δώματ' ἴσαν θείου βασιλῆος.  
οἱ δ' ἦγον μὲν μῆλα, φέρον δ' εὐήνορα οἶνον.  
σῆτον δέ σφ' ἄλοχοι καλλικρήδεμνοι ἔπεμπον.  
ὥς οἱ μὲν περὶ δεῖπνον ἐνὶ μεγάροισι πένοντο,  
μνηστῆρες δὲ πάροιθεν Ὀδυσσεύς μεγάροιο 625  
δίσκοισιν τέμποντο καὶ αἰγανέησιν ἱέντες,  
ἐν τυκτῷ δαστέδῳ, ὅθι περ πάρος, ὕβριν ἔχοντες.  
Ἀντίνοος δὲ καθήστο καὶ Εὐρύμαχος θεοειδής.  
ἄρχοι μνηστήρων, ἀρετῇ δ' ἔσαν ἔξοχ' ἄριστοι.  
τοῖς δ' οὐδὲ φρονόιοι Νοίμων ἐγγύθεν ἔλθων 630  
Ἀντίνοον μύθοισιν ἀνειρόμενος προσέειπεν.

このように彼らは互いに語り合っていた。客たちが神々しい王の館にやって来る、彼らは羊を追って  
来たのだ、そして男を喜ばすぶどう酒を携えて来た。美しいペールを被った彼らの奥方がパンを送って  
寄越した。彼らはこのようにして館で宴の準備をしていた。一方求婚者たちはオデュッセウスの館の前  
で円盤で楽しみ、かつ長槍を投げ合っていた、踏み固めた床の上で、以前にもよくそうしていた場所で、  
高慢である彼らは。アンティノオスが座っていた、又神々しいエウリュマコスが、求婚者の頭たちが、  
彼らは徳において最もすぐれたものであった。彼らにプロニオスの息子ノエモンが近づき、尋ねながら  
アンティノオスに言葉をかけて言った。

未完過が急に固めて用いられている。実はこの数行は舞台の場面がメネラーオスの館から1巻のオデュッセウスの館へと一転する箇所なのである。624行目からの節は、その前の節と同じく「Ὡς οἱ μὲν」という形式で始まっているのが目につく。しかし場面が変わるのは次の行からである。「求婚者たち」によって、まずそれが合図される。この語は1巻で頻繁に出てくる語で、いわば1巻を象徴する語である。次いで「オデュッセウスの館」、こうした語彙と共に時制によってもそれが合図されている、と考

えられる。すなわち 620～624 行においてメネラーオスの館での物語りの終結が「背景」の時制である未完過を固めて用いることによって合図されている。語り合っていた、やってくる、追って来た、携えて来た、送って寄越した、準備をしていた。それに対して 625～629 はオデュッセウスの館での物語りの導入部である。楽しみ、座っていた、であった、さらには現在分詞の投げ合っていた、である、もこの中に入れて良いと考えられるのであるが、<sup>9</sup>すべて背景の時制である。そして 630 行目の ἐγγύθεν ἐλθὼν〔近付き，aor. part.〕προσέειπεν〔言った，aor.〕という前景の時制によって本来の筋が始まる、と分析できる。

この προσέειπε について一言述べておこう。オデュッセイアは登場人物がすべて一人称で語る、すなわち登場人物だけでなく、登場人物の物語りの中に出てくる人物が又一人称で語る、という典型的な一人称物語り Ich-Erzählung なのであるが、その場合、「言った」を表わす様々な動詞を巧みに配することにより、文脈が不鮮明になることが防がれているように思われる。少なくとも 4 巻においては προσέειπεν をめぐって興味深い分布が見出される。

①登場人物が直接語る場合（数字は 4 巻全体の中で現われた形式の延べ）Τὸν δὲ μέγ' ὀχθήσας προσέφη ξανθὸς Μενέλαος 彼に対して腹を立ててブロンドの髪のメネラーオスが言うには（impf）「～」の形式：προσηύδα〔話しかけた〕(3)，προσέφη〔話しかけた〕(10)，προσεφώνεε〔呼びかけた〕(1)，ἐρέεινεν〔尋ねた〕(1)，ῥύδα〔言った〕(4)，ἔπα πτερόεντ' ἀγόρευεν〔（翼ある言葉を）吐いた〕(2)，ἡμέιβετ'〔答えた〕(2)，μετηύδα〔言った〕(1)，μετέφη，〔言った〕(1)，以上 25 形式の未完了過去に対して，προσέειπε〔言った，（アオリスト）〕は 7 形式見出される。δ 631，696，706，773（2 形式），803，830 がその箇所である。

②登場人物が物語りをする、その物語りの中でさらに誰かが言うという場合、たとえばメネラーオスの帰還の話の中で「海の老人プロテウスをわれわれは捕えた、その老人が言った『～』：προσέειπεν〔アオリスト〕(9)，ἐφάτ'〔アオリスト〕(1)に対して ἡμέιβετο〔答えた，未完過〕(1)。

このように①と②は動詞の種類，時制という点で際立った対照を示している。そして①において προσέειπεが使われている箇所はすべて浮き彫り付与の観点から説明することができる。すなわちそこは前景の時制でなければならない箇所である。まさにこの 631 行目がそれに該当するのである。

2. 直説法アオリストと未完了過去についてのヴェッカーナーゲルの説明は、基本的には妥当なものであると思われる、しかし彼自身が解答を保留している、あるいは必ずしも明確に解答を与えていない問題が残っている。まず彼の言を引用しておこう。「直説法アオリストと未完了過去の間の基本的な差異は充分に明らかにされている。しかしわれわれは何も自己を偽るつもりはない。しばしば、そしてまさに最古のギリシア語において、さらには完成期の散文家達において、何か過ぎ去ったものについて述べる場合の未完了過去とアオリストはわれわれの語感ではゴチャゴチャと入り混んでいるのである。ホーマーを取りあげてみよう。アルゴスの統治権に関し、笏杖がどのように世代から世代へと伝わったかを述べる件りで，B 106 Ἀτρεὺς δὲ θυήσκων ἔλιπεν πολύαρονι Θυέστην，〔アトレウスは死に際に、羊を沢山持

っていたテュエステースに残した〕、そのすぐ後で αὐτὰρ ὁ αὖτε Θυέστ' Αγαμέμνονι λείπε φορῆναι,〔それをまたさらにテュエステースがアガ멤noonに残したのであった〕。ここでは同じ事実が、同じように形成された文の中で、ある時は ἔλειπεν(アオリスト)によって、ある時は λείπε〔未完過〕によって表現されている。<sup>10</sup>この問題を解決する指針として、ヴァッカーナーゲルは既に 1.で引用した説明 (cf. p. 30) を行っているが、明確さを欠いているように思われる。この問題も 1.で分析したのと同じ方法で、すなわち時制推移を考慮することによって解決することができると思われる。私自身がオデュッセイアを読んでいて、やはり同じ動詞がアオリストから未完過へと変わり、その信号音が何を意味するのか、すぐに気付いた例を取り上げて分析してみよう。テキストは 4 巻の 454 ~ 461, 海神ポセイドーンの召使いプロテウスをメネラーオス一行が捕えようとする場面である。

ἡμεῖς δὲ ἰάχοντες ἐπεσόμεθ' ἀμφὶ δὲ χεῖρας  
βάλλομεν· οὐδ' ὁ γέρων δολίγης ἐπελήθετο τέχνης,  
ἀλλ' ἦ τοι πρότιστα λέων γένετ' ἠυγένειος,  
αὐτὰρ ἔπειτα δράκων καὶ πάρδαλις ἡδὲ μέγας σὺς·  
γίγνεται δ' ὕγρον ὕδωρ καὶ δένδρεον ὑψηπέτηλον·  
ἡμεῖς δ' ἀστεμφέως ἔχομεν τετλήοτι θυμῷ.  
ἀλλ' ὅτε δὴ ρ' ἀνίαζ' ὁ γέρων ὀλοφώϊα εἰδώς,  
καὶ τότε δὴ μ' ἐπέεσσιν ἀνειρόμενος προσέειπε·

455  
460

われわれは大声をあげて突進した。そして両手をまきつけた。老人はずるい技を忘れてはいなかった。  
まず最初はひげのあるライオンになった。次に竜にそして豹に、それから大猪に、また流れる水に変ら  
んとする、そして高く葉をつけた木に。われわれは心を励まして、しっかりと握んでいた。ずる賢いこ  
とを知っている老人が疲れてきた、とそのとき老人は私に言葉で尋ねて言った。  
と

同じ事実が同じ動詞のあるときは、γένετ'〔なった, aor.〕によって、あるときはγίγνεται〔変らんとする, impf.〕によって表現されているが、このγίγνεταιは次に続く二つの未完過ἔχομεν〔握んでいた〕、ἀνίαζ'〔疲れて来た〕と共に一種の終結部を形成していると考えることができる。ここでは格闘場面の描写を終結することが、そして次に老人の発言へと事件が新たな展開を始めるのである。その新しい展開を合図するのが 461 行目のπροσέειπε〔aor.〕である。それではヴァッカーナーゲルのあげている B 106 の例を検討してみよう。101 行から笏杖の由来が述べられる。それはヘーパイトスが作ったものであった〔κάμε aor.〕ヘーパイトスはそれをゼウスに渡した〔ᾔωκε aor.〕、以下二つのᾔωκεが続く、B 104 αὐτὰρ ὁ αὖτε Πέλοψ δῶκε Ἀτρεΐδι ποιμένι λαῶν・〔それを又さらにペロプスが兵士達の統率者、アトレウスに渡した, aor.〕, Ἀτρεὺς δὲ θνήσκων ἔλειπεν πολύαρνι Θυέστη,〔アトレウスは死に際に、羊を沢山持っていたテュエステースに残した, aor.〕

αὐτὰρ ὁ αὖτε Θυέστ' Ἀγαμέμνονι λεῖπε φορῆναι, [それをまたさらにテュエステースがアガメムノンに残したのであった, impf.] τῷ ὁ γ' ἐρεϊσάμενος ἔπε' Ἀργείοισι μετήνδα [その笏杖によりかかって, アガメムノンは, アルゴス勢に話をしかけた, impf.] B 107 の λεῖπε [残したのであった, impf.] によって由来の話に結着が付けられ, 次のアガメムノンの発話へと話が進展して行くのである。この λεῖπε は B 104 と同じく αὐτὰρ ὁ αὖτε に導かれる文の中に置かれていることにより, 4 つの ᾔκε [渡した, aor.] と相対立し, そして B 106 の ἔλπευ [残した, aor.] とは時制という点で相対立しながら, 由来の話が終ることを合図しているのである。このような位置に置かれている ἔλπευ と λεῖπε をそれが同じ動詞の定形であるという理由だけで, ヴェッカーナーゲルの言うように, 同じように形成された文の中に置かれている, と言えるだろうか。二つの文, 否二つの動詞は「語り」口という点ではっきりと相異している。ある事柄を述べ, 次に別の事柄を述べようとする場合に, 「語り」のテンボを何らかの方法で緩めるという現象はどの言語の物語りにも見出される, いわば「語り」の普遍的法則とも言えるものなのである。古典ギリシア語の未完了過去の一つの用法をそのように把握した場合, 二つの過去の形式はわれわれの語感にとっても, きわめて近付き易いものとなってくるのではなからうか。

8. この問題を, すなわち同じ事実が同じように形成された文の中で, ある時はアオリストにより, ある時は未完了過去によって表現されるという問題をシュヴューツァー E. Schwyzer は敢えて統語論的に説明しようとしているが, その記述は不充分である, と指摘できる。彼の挙げている例文を検討しながら, 1, 2 とは別の角度からこの問題を考察して行こう。まず彼の言を引用しておく。「主語の数と種類が動詞形式に関与している。すなわち未完了過去の主語は, およそのみで規定される複数であり, アオリストの主語は厳密な数の複数かあるいは単数である。ἐκ δὲ καὶ αὐτοὶ βαῖνον [impf.]…… ἐκ δὲ Χρυσήϊς νηὸς βῆ [aor.] A 437ff (その前にもアオリスト形式が, 他動詞であるにしても βῆσαν 438<sup>11</sup>)」すなわち, ἐκ δὲ καὶ αὐτοὶ βαῖνον ἐπὶ ῥηγμῖνι θαλάσσης, [彼ら自身も海の波打ち際に降りて], この場合は主語が不特定多数の舟乗りたちであるから未完了過去, ἐκ δ' ἐκατόμβην βῆσαν ἐκπρόλῳ Ἀπόλλωνι [遠矢を射るアポローンに犠牲の牛を降ろせば], 主語は同じく不特定多数の舟乗りたちで, かつ同じ動詞のアオリストが用いられているが, この場合は他動詞であるので, 記述の枠から外す, ἐκ δὲ Χρυσήϊς νηὸς βῆ ποντοπόροιο [クリューセーイスは舟から降り立った], 主語が単数であるからアオリストである, とシュヴューツァーは説明しているが, 私には納得できない。統計的な数量調査をすれば, あるいはそのような傾向が出て来るかもしれない。そのことが予測できることは, 以下の説明で明らかになる筈である。問題点は二つあると思われる。第一点は何故そのような傾向があるのか, すなわち不特定多数の場合に未完過が用いられ, 単数の場合にはアオリストが使われる傾向があるのは何故かという質問に答えなければならない, ということである。第二点是他動詞を説明の枠から外したのは何故かという疑問である。もち論, 自動詞の「降りて」と他動詞の「降ろせば」とでは意味が違い, 同じ事柄を表わしているとは言えない。しかし, それでは同じように形成された文の中で, 主語は同じく

不特定多数の場合に、自動詞は未完過で、他動詞はアオリストで言い表わされる、と規則化できるであろうか。できないことは明白である。未完了過去とアオリストの問題を個々の動詞の意味内容から考察していこうとすると、その議論は錯綜したものとなり、遂には解決を見出せないままに終わってしまうように思われるのである。テキストを検討してみることにしよう。

τήν ῥα βίη ἄεχοντος ἀπηύρων· αὐτὰρ Ὀδυσσεὺς 430  
 ἐς Χρύσην ἵκανεν ἄγων ἱερὴν ἑκατόμβην.  
 οἱ δ' ὅτε δὴ λιμένος πολυβενθέος ἐντὸς ἵκοντο,  
 ἰστία μὲν στείλαντο, θέσαν δ' ἐν νηϊ μελαίνῃ,  
 ἰστὸν δ' ἰστοδόκη πέλασαν προτόνοισιν ὑφέντες  
 καρπαλίμως, τὴν δ' εἰς ὄρμον προέρεσαν ἐρετμοῖς. 435  
 ἐκ δ' εὐνὰς ἔβαλον, κατὰ δὲ πρυμνήσι' ἔδησαν.  
 ἐκ δὲ καὶ αὐτοὶ βαῖνον ἐπὶ ῥηγμῖνι θαλάσσης,  
 ἐκ δ' ἑκατόμβην βῆσαν ἐκηβόλῳ Ἀπόλλωνι.  
 ἐκ δὲ Χρυσήϊς νηὸς βῆ ποντοπόροιο.

さてオデュッセウスは聖なる犠牲の牛を積んで、クリューセーに到着した。彼らは深い入江の中に入  
 ってくる<sup>ア</sup>と、帆を下ろし<sup>ア</sup>、黒塗りの舟の中へ収め<sup>ア</sup>、帆柱を受け木にたぐり寄せた。柱の前の張り綱を引  
 いて<sup>分</sup>、船を泊り場へと、櫂を使って漕ぎ進めた。重しの石を投げ<sup>ア</sup>、ともづなで固くゆわえた。彼ら自身  
 も海の波打ち際に降りて、遠矢を射るアポロンのために犠牲の牛を降ろせば、クリューセーイスも大  
 海を渡る船から降りた。<sup>未完過</sup>  
 ア

この箇所は、オデュッセウスがアポロンの怒りを鎮めるために神官の娘クリューセーイスを神官に返  
 すために、クリューセーの町へ出かけていく場面である。全体は「前景」の時制であるアオリストによっ  
 て物語りがどんどん先へ進められている。問題になっている箇所は、最後の「降りて」( impf. ), 「  
 降ろせば」( aor. ), 「降りた」( aor. )である。

まず、最後の「クリューセーイスは降りた」は、娘を返しに行くというのであるから、この場面では最  
 も主要な行為である、当然アオリストが用いられる。それに対して舟乗り達が舟から降りることは付随  
 的事情である、従って「背景」の時制の未完過が用いられる。さて犠牲の牛を降ろす行為がアオリスト  
 で言い表わされているのは何故だろうか。次に祭壇に犠牲を捧げる行為が述べられるのであるが、アポ  
 ローン神の怒りを鎮めるための犠牲の牛、それを降ろしたというのであるから、やはり主な行為Hau-  
 pthandlungと考えられるのである。すなわち ἐκ βαῖνον〔 impf. 〕は最後の ἐκ βῆ〔 aor. 〕とだけでは  
 なく ἐκ βῆσαν〔 aor. 〕とも緊密に関連し合いながらその二形式の浮き彫り付与に役立っているのである。

4. 前景, 主な行為, ヴァッカーナーゲルの言葉を使えば, 一連の行為あるいは経過の中の主要因とは何か, それに対する背景, 付随的事情とは何かをもう少し具体的にテキストの中で考察してみよう, 問題として取り上げる箇所は, オデュッセイア 9 巻の 177, 179, 195 f である。ここでは基礎動詞 *βαίνω* を同じくする動詞, すなわち *ἀναβαίνω* [私は乗る], *εἰσβαίνω* [私は乗り込む], *βαίνω* [私は進んで行く] が用いられており, 単数にはアオリストが, 不特定多数の複数には未完過が使われている。もち論, 動詞が違っているのであるから, 同じような事柄を表わしているとは言えない。しかしこの考察では, 個々の動詞の表わす意味内容よりは, 時制推移の方を重視しようとするものであるから, 許されるであろう。177 ὧς εἰπὼν ἀνὰ νηὸς ἔβην, [私はこう言って舟に乗った, aor.], 179 οἱ δ' αἶψ' εἰσβαίνουσι [彼らはすぐに乗り込んだ, impf.], 195 f αὐτὰρ ἐγὼ κρίνας ἑτάρων δυοκαίδεκα ἄριστους βῆν. [さて, 私は12人のすぐれた仲間を選んで, 進んで行った, aor.], 主語が一人称単数の場合にはアオリストが, 不特定多数の場合には未完過が用いられている。時制が何故そうなるのかを物語りの構造を分析しながら説明してみよう。まず私というのはオデュッセウスであり, 物語りの直接の聞き手はアルキノオス王およびフェニキアの諸侯である。これから語られようとするのは, 彼の冒険談の中でも最も大きな事件である, キュクロプスの島での出来事である。この事件がいかにオデュッセウスにとって恐ろしい体験であったかは, 12巻 208ff, 「友よ, われわれはもう禍いは経験済みだ。キュクロプスとその暴力でわれわれをうつろな岩屋に閉じ込めた時にくらべれば, 今おれたちの面しているのは, それほどのことではないのだから」, と回想する言葉からも窺い知ることができる。さて 9 巻 177 以下の場面に至るまでの時制の分布についてまず述べておこう。107 行目からキュクロプスの島およびその近くにある島の説明が始まる。定形としては現在16形式, 現在完了 3 形式, アオリスト 1 形式, 準定形としては希求法現在 5 形式, 接続法現在 1 形式, 接続法アオリスト 1 形式, 現在分詞 2 形式, 完了分詞 1 形式, アオリスト分詞 1 形式, 不定法現在 2 形式, 不定法アオリスト 2 形式である。定形に関して言えば, ヴェインリヒの言う「説明」の時制である現在, 現在完了が圧倒的に多いことが目に付く, アオリスト 1 形式は, 過去の事実と反対の想像を述べるときに使われる直説法アオリストである。希求法 5 形式は可能性を表わす希求法であり, 接続法 2 形式は期待の接続法である。この接続法現在と接続法アオリストの対比はやはり前景と背景という観点から説明できるのであるが, ここではそれに触れないことにする。さて 141 行目からの五つの未完了過去によって物語りの中での動きが徐々に始まる。κατεπλέομεν, [われわれは舟をつけた], τις θεὸς ἡγεμόνευε [誰か神が導かれたのだ], προὔφαινετ' [先が見えず], οὐδὲ σελήνη οὐρανόθεν προὔφαινε, [空には月も見えず], κατείχετο δὲ νεφέεσσιν. [雲に包まれていた]。島で一夜を明かし 171 行目から, いよいよキュクロプスの島に乗り込む件である。



καὶ τόγ' ἐγὼν ἀγορὴν θέμενος μετὰ πᾶσιν ἔειπον·

“λλοὶ μὲν νῦν μίμνεντ', ἐμοὶ ἐρίηρες ἐταῖροι·

αὐτὰρ ἐγὼ σὺν νηϊ τ' ἐμῇ καὶ ἐμοῖς ἐτάροισιν

ἐλθὼν τῶνδ' ἀνδρῶν περὶρήσομαι, οἳ τινές ἐσιν,

ἢ ῥ' οἳ γ' ὑβρισταί τε καὶ ἄγριοι οὐδὲ δίκαιοι,

175

ἦε φιλόξεينوι, καὶ σφιν νόος ἐστὶ θεοῦδής.”

Ἵς εἰπὼν ἀνὰ νηὸς ἔβην, ἐκέλευσα δ' ἐταίρους

αὐτοῖς τ' ἀμβάινειν ἀνά τε πρυμνήσια λῦσαι.

οἳ δ' αἶψ' εἰσβαίνον καὶ ἐπὶ κληῖσι καθίζον,

ἐξῆς δ' ἐζόμενοι πολὺν ἄλα τίπτον ἐρετμοῖς.

180

ἀλλ' ὅτε δὴ τὸν χῶρον ἀφικόμεθ' ἐγγὺς ἔοντα,

. . . . .

Δὴ τότε τοὺς ἄλλους κελόμην ἐρίηρας ἐταίρους

αὐτοῦ παρ νηῖ τε μένειν καὶ νῆα ἔρυσθαι·

αὐτὰρ ἐγὼ κρίνας ἐτάρων δυοκαίδεκα ἄριστους

195

βῆν·

その時、会議を開いて皆の間で私は言った。「他の者たちはここに残っていないさい、私の忠実な仲間たちよ。私は私の仲間たちと私の舟で出かけて行って、彼らが人間共のうちでどんな人々なのか調べて来ようと思う。非常に横柄で野蛮で不正な族々のかあるいは、よその人に親切でかつ心が神を恐れる人々であるかを。」こう言って私は舟に乗った。仲間達にも乗るようにそしてとも綱を解くように命じた。彼らはすぐに乗り込み、ベンチに座り………

そこで、他の忠実な仲間たちにはその場に、舟の傍にとどまって舟を守っているように命じ、一方私は仲間たちのうちで一番すぐれた者12人を選んで進んで行った。

私の注意を引くのは、ここでは一人称を表わす人称代名詞および所有形容詞が異様に多く使われていることである。171〔皆の間で私は(ἐγὼν)言った〕、172〔私の(ἐμοῖ)忠実な仲間たちよ〕、173〔私は(ἐγὼ)私の(ἐμῇ)舟で私の(ἐμοῖς)仲間たちと〕、そしていよいよキュクロプスの岩屋に向かう件では、195〔私は(ἐγὼ)12人のすぐれた者を選んで〕。特に強調する時以外に使われることのない一人称の人称代名詞が三度、しかもその効果をさらに強めるかのようになつた斜格形式と二つの所有形容詞が使われている。近代語的な感覚で、いや、古典期およびコイネーギリシア語の感覚で、これを捉えようとしてはならない。これから身の毛のよだつ話を、すなわち巨人キュクロプスによって岩屋に閉じ込められ、仲間達が次々と食べられてしまうという恐ろしい体験を思い出し、「私は～」

「私は～」と身震いしている語り手、オデュッセウスの姿がほうふつとするのである。すなわち物語りの聞き手および読者はこれらの一人称の人称代名詞と所有形容詞によって、語り手に関わる何か異様な事件がこれから語られるのだ、ということをご承知なく意識させられるのである。これらの人称代名詞の配置に関して、もう一点、指摘しておかねばならないことがある。すなわち 171 行目の〔私は会議を開いて、皆の間で言った〕の直接の聞き手はフェニキアの王アルキノオス達なのであるが、172 行目の〔私の忠実な仲間達よ〕および 173 行目の〔私が私の舟で私の部下たちと〕の直接の聞き手はオデュッセウスの仲間たちである。そして 195 行目の〔私は12人のすぐれた者を選んで進んで行った〕の聞き手は再びアルキノオス王達である。物語りが二重構造になっているために異様さが中和されると考えられる。その信号をすべて受け取る立場にある物語りの聞き手および読者は異様な印象を受けるのである。さて、オデュッセウスの語る物語りの直接の聞き手に対して ἐγὼ が二度使われている文を比較すると面白い事実が判明する。

171 καὶ τότε ἐγὼν ἀγορὴν θέμενος μετὰ πᾶσιν ἔειπον  
ア 分  
 195 αὐτὰρ ἐγὼ κρίνας ἐτάρων δυοκαίδεκα ἀρίστους  
ア 分  
βῆν.  
ア

語順が比較的自由なホメロスのギリシア語において、この二文は主語の位置、定形の位置および分詞の位置に関し完全な一致を示している。これは何を意味しているのだろうか。実は 171 の ἐγὼν が使われている文から 194 行目までは一つの枠を構成しているのである、この枠の中で語られる事柄はキュクロプスの島での物語りのいわば序曲とも言えるものなのである。そして 195 行目の同じく ἐγὼ が使われている文から、本来の物語りが始まると考えられる。すなわち物語りの構成上異質な部分の冒頭部に両文は配置されているのである。両文の時制に目を向けて見よう。定形 ἔειπον、および βῆν はアオリストである、さらに準定形の θέμενος および κρίνας もアオリスト分詞である。まさにヴァインリヒの言う、浮き彫り付与という言葉が適切に当てはまるアオリストの用法と言えよう。すなわち両文は強調の一人称代名詞の使用、さらには語順の一致のみでなくアオリストを用いることによって物語りの構造を鮮かに浮かび上らせているのである。

195 の βῆν がアオリストになっている理由は上のように説明することができるのであるが、それは 177 Ὡς εἰπὼν ἀνὰ νηὸς ἔβην, [こう言って私は舟に乗った, aor.], 179 οἱ δ' αἶψ' εἰσβαίνουν [彼らはすぐに乗り込んだ, impf.] の場合はどうであろうか。すでに説明したように、この場面では私の行為に、非常に力点が置かれているのであるから、時制はアオリストが自然である。さらに言えばこれ以外の時制はあり得ないと言えないであろうか。一方仲間たちの乗り込むという行為は、それに続く二つの未完了過去、すなわち καθίζον (ベンチに) つき, ἐξῆς δ' ἐξόμενοι πολὺν ἄλα τύπτον ἐρετμοῖς. [並んで座って(現分), 灰色の海をオールでパタパタと打って行った, impf.] と共に明らかに背景描写なのである。そして次の行の ἀλλ' ὅτε δὴ τὸν χώρον ἀφικόμεθ' ἐγγὺς ἐόντα, [さて近くの島に着いた時, aor.] の文によって物語りの新たな展開が始まる。

5. 以上、オデュッセイアの物語りの構造分析を通して明らかにしてきたように、ヴァインリヒの言う「前景」、「背景」という指標は最古のギリシア語の対立する二つの過去形式にも有効であると考えられる。そして直説法以外のアオリストとそれ以外の諸形式の対立は、この「前景」、「背景」という指標<sup>12</sup>に関わるものと考えることができる。もち論それを確証するためには、これから先のもう少し精密な分析が必要なのであるが。

＜ 完 ＞ 1979年12月31日

付記：本稿は1979年9月15日、広島大学で行われた第9回西日本言語学会で口頭発表したものに加筆したものである。

1. Weinrich, Harald: Tempus. Besprochene und erzählte Welt. Stuttgart, 1964
2. 彼は時制を発話態度 Sprechhaltung, 発話の方向 Sprechperspektive, 浮き彫り付与 Relief-  
gebung という三つの観点から捉えて行こうとするのであるが、彼の主張に沿ってギリシア語の時  
制を分類すると、次のようになるであろう。

(1)

発話の方向 発話態度	回 顧	ゼ ロ 点	予 見
「説明」の時制	現在完了	現在	未来
「語り」の時制	過去完了	未完了過去 直 説 法 アオリスト	

(2) 浮き彫り付与

定 形

	前 景	背 景
「語り」の時制	直 説 法 ア オ リ ス ト	未完了過去

準 定 形

前 景	背 景
命 令 法 ア オ リ ス ト	命 令 法 現 在
接 続 法 ア オ リ ス ト	接 続 法 現 在
希 求 法 ア オ リ ス ト	希 求 法 現 在
不 定 法 ア オ リ ス ト	不 定 法 現 在
ア オ リ ス ト 分 詞	現 在 分 詞

3. Weinrich S. 93
4. ebenda
5. Weinrich S. 94
6. Wackernagel, Jacob : Vorlesungen über Syntax I. S. 183
7. Weinrich S. 93
8. Weinrich S. 92
9. 注2 参照
10. Wackernagel, I S. 182f.
11. Schwyzer, Eduard : Griechische Grammatik II. S. 278
12. 注2 参照